



Data

監督・脚本: ロドリゴ・ソロゴイェン

共同脚本: イサベル・ペーニャ

出演: マルタ・ニエト/ジュール・ポリエ/アレックス・ブレン
デミュール/アンヌ・コンシニ/フレデリック・ピエロ/
ラウール・プリエト

👁️👁️ みどころ

短編が評価されたため、それを生かして長編を！その成功例が『SKIN/スキン』（19年）だ。本作もそのパターンで、ヒロイン役の女優は、第76回ヴェネチア国際映画祭オリゾンティ部門で主演女優賞を受賞！

10年前に失踪した我が子の“おもかげ”が、この少年に！そうならば親密度が増していくのは当然だが、年上の女に引っ掛けられているのでは？少年の両親がそう心配したのも当然。ちょっとした、“ひと夏の経験”だけで終わればいいのだが・・・？

美しい風景の中で展開される物語は、会話劇中心だが、別れた夫や現在の恋人はどんな役割を？私にはそこらの展開がイマイチ不満。さらにラストも、わかったようなわからないような・・・。



■□■まず短編を！それを生かして長編を！■□■

まず短編を作ったところ、それが大ヒットしたため、短編のテーマを膨らませた長編を作り、それも大ヒットさせたのが『SKIN/スキン』（19年）（『シネマ47』37頁）だった。本作もそれと同じように、2017年に製作した15分の短編が第91回アカデミー賞短編実写映画賞にノミネートされるほど高く評価されたため、それをそのまま生かして長編映画にしたものだ。

もっとも、『SKIN/スキン』は短編も長編もテーマや登場人物は同じだが、脚本も演出も全く違うものだった。それに対して本作は、導入部の15分は短編をそのまま使用し、その後は10年後のヒロインの姿を描くスタイルにしている。これは、ロドリゴ・ソロゴイェン監督が、サスペンスに満ちた短編が長編映画の非常に長い冒頭シーンのように感じたこと、短編とは全く違ったジャンルとして長編映画を作ろうと考えたためだ。なるほど、

なるほど・・・。

■□■短編の出来は秀逸！緊迫下で終わった短編の後は？■□■

本作の導入部としてそのまま使った15分の短編は4日間の撮影で完成させたそうだが、その95%がワンカット。その舞台は、スペインのマドリッドにあるエレナ（マルタ・ニエト）の家の中だ。エレナには離婚した夫・ラモン（ラウル・プリエト）との間に6歳の息子・イバンがいたが、今、イバンはラモンとフランスのアンダイエあたりを旅行中だ。

エレナの家を訪れた母親と他愛もないおしゃべりをしている時にかかってくるケータイを取ると、そこからはイバンの声。当初は気楽にしゃべっていたが、何かヘン！一緒にいるべき父親が見当たらないらしい。そして、今イバンがいるのは海辺。そこには人は誰もおらず、建物もなく、今どこにいるのかわからないらしい。なるほど、これが冒頭にスクリーン上いっばいに映し出されていたあの海辺の風景なのか！

私とその海辺の風景を観ながら思い出していたのは、イラン映画の名作『彼女が消えた浜辺』（9年）『シネマ25』83頁）に再三登場していた、イランの首都テヘランにあるカスピ海のリゾート地。同作ではその海辺から忽然と彼女（＝エリ）が消えたことを巡って極上の密室型推理劇を堪能することができた。しかし、なぜか今たった一人で海辺にいるらしい6歳の息子・イバンは、これからどうなるの？心細くなって泣き始めるイバンに対して、エレナは「何が見える？」と必死に手掛かりを探したが、要領を得ない。すぐに警察に電話したものの、警察は「手続きを踏んでください」と繰り返すばかりだ。再び電話してきたイバンは、「近くに怪しい男がいる」と声を震わせていたため、エレナは「全力で逃げろ」と指示。イバンは何とか木の陰に隠れたようだが、再び発見されたら電話してきた瞬間に電話が切れてしまったから、さあ大変。それが、息子の声を聴いた最後の瞬間になるうとは・・・。

■□■あれから10年。エレナはどこで何を？この男の子は？■□■

あれから10年。エレナは今、イバンがいなくなったフランスの町ヴェ＝ブコー＝レ＝バンで、レストランの雇われ店長として働いていたが、それは一体なぜ？長編ではその説明は一切ないが、その町にはエレナのこを“息子を失ってイカれたスペイン人”と中傷する人もいたから、本来ここはエレナにとって居心地の良い場所ではないようだ。長編のストーリーが突然始まるのは、海辺を散歩していたエレナが、ある日イバンの面影を宿した少年ジャン（ジュール・ポリエ）と出会った時から。思わずその後をつけていくと、ジャンとはある家の中へ・・・。

エレナが、毎日のように友人たちと浜辺でサッカーに興じているこの少年ジャンと話すきっかけを持つと、ジャンはパリの家から夏の間だけ家族でこの海辺にやって来ているらしいことがわかった。もちろん、エレナはジャンの中にイバンの“おもかげ”を見ただけだが、イバンの10年後を想像すると・・・？

ロドリゴ監督が短編を導入部とした長編の製作を思いついたポイントはそこだが、それ

だけでいかに面白い物語を展開させることができるの？そう心配していると、案の定・・・。

■□■この親密度はナニ？息子ではないから、ひょっとして？■□■

今のエレナには恋人のヨセバ（アレックス・ブレンデミュール）がいた。この2人は今うちに結婚してパリで暮らすことが既定路線のようだから、エレナがいつまでも一人でこんな海辺のレストランで働く必要がない。ところが、ジャンと出会ってからのエレナの頭の中はジャンの事でいっぱいになっているようだから、ヨセバがそれを心配したのは当たり前。ヨセバから「彼は君の息子ではない」と言われるまでもなく、エレナにはジャンが成長したイバンではないことはわかっているし、ジャンがあフランス人家族の一員であることもわかっている。それなのに、この2人の間に突如発生したこの親密度は一体ナニ？

その一因がイバンの“おもかげ”であることは明らかだが、それだけでスクリーン上で観るような2人の関係になっていくの？10代の息子がワケの分からない年上の女につきまといわれている。そう心配した両親が、ジャンをエレナから引き離そうとしたのは当然だが、それに対するジャンの反発は？そして、「両親と話して」とジャンからのメッセージを受けたエレナの反応は？

本作中盤に見るそこらあたりの展開は、私には不可解だ。さらに、ひょっとしてこの2人は男女の仲に・・・？いやいや、そんなことはあり得ない。そう思いながら見ていると、あるところで二人がキスを交わすシーンが登場するのでアレレ、まさか、ひょっとして・・・？

■□■わかったような、わからないような・・・？■□■

本作は、エレナと10年前に失踪したイバンの面影を宿す少年ジャンとの出会いと、その2人の物語がストーリーの軸だが、同時にエレナには現在の恋人ヨセバと、別れた夫ラモンがいたから、その2人の間の物語も展開していく。ジャンに固執する中で、少しずつヨセバとのこれからの生活に興味を失いかけている(?)エレナをヨセバが心配したのは当然だから、この2人がどうなるかが心配だ。他方、ラモンは親しいパートナーとの間に現在8か月となる子供がおり、「自分は立ち直りつつある」とエレナに報告するのだが、そんな2人が話し合っているうちに突然険悪な雰囲気になっていくので、アレレ・・・？

そもそも、こんなストーリーやこんなシークエンスをロドリゴ監督はなぜ用意したの？そう思っていたが、本作は、ジャンとの「ひと夏の経験」を終えたエレナがおもむろにケータイをとり、ラモンにかけるシーンで終わるので、それにも注目！これは一体ナゼ？私にはわかったような、わからないような・・・。

2020（令和2）年11月6日記